

国立国語研究所学術情報リポジトリ

The Methodology of Linguistic Geography and the Methodology of Language History

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-02-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 柴田, 武, SIBATA, Takesi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001740

言語地理学の方法と言語史の方法

柴 田 武

1 はじめに

言語地理学の目的の一つは、一定の物または事を表わす異称の地理的分布から、それらの時間的な系列関係（以下、これを歴史とよぶ）を推定することである。それは、言語の歴史を追究することであるから、過去の文献によって言語の歴史を推定する、いわゆる言語史と目的は同じである。

そこで、われわれの興味を引くことは、それぞれの方法によって推定した二つの歴史を比べてみることである。この二つを比べて、それらが一致すれば、言語地理学が歴史を推定する方法として有効であることの検証にもなり、これによって、さらに、文献では求められないことばの歴史の解明に期待が寄せられる。また、このような二つの歴史を総合して真の歴史を推定することも考えられる。本稿で試みるのはこれである。ただ、わたくしは、はじめに言語地理学の方法だけで、推定しうる限りのところまで進み、その後、文献とつぎ合わせることをしてみようと思う。

ところで、このような二つの歴史をつぎ合わせることのできるのには、日本では、地域が京都付近であるか、全国であるかのいずれかの場合である。日本では、地方に、同じ方言を記した文献が時代を追っていくつも残っている例は、まず見当たらない。地方によっては過去の文献を残しているところもあるが、多くは、それが一つであったり、二つ以上あるにしても、ほぼ変わらない時代に属するものであったりして、文献だけからその地方の言語史を推定することは望み薄である。

幸に、国立国語研究所ではいま、沖縄を含む日本語全地域の方言分布図を作成中である。この「日本語地図」からは、日本語全地域の言語史を推定できるはずであるから、これを、多くは日本の「標準語」または京都付近の方言を反映し

た、おびただしい文献から推定される歴史とつき合わせる事が期待できる。この「日本語地図作成のための調査」は、8年めの今年度（昭和39年度）に完了することになっている。ここでは、6年めまでの材料で仮に描いた、概略の分布図を使うことにする。さらに2年度分の材料を加えると、おそらく分布に多少の出入りが生ずると思われるが、大勢に影響があるはずはなく、また、ここでの議論に差し支えるほどの出入りではなかろうと考える。

2 「ほくろ」の方言分布

ここでとりあげるのは、「ほくろ」の分布図である（図1）。その材料は、調査の際「体に黒いごまつぶぐらいの点のあることがあります、その点のことを何と言いますか。」という一定の刺激を与えて得た反応である、種々の異称である。

図1を見て、まず気づく最も著しい特徴は、東北方面と九州・四国方面とに「アザ」があるということである。これと関連して、両地方に接する地域である宮城・福島県と島根県とに「ホシ」があることが注意を引く。この分布から言語地理学が教える歴史は、アザが最も古いことばで、ついで、ホシが古いことばであるということである。それは、かつて古くは京都付近でも「ほくろ」のことをアザと言っていたということ、すなわち、かつてはアザが「標準語」であったということである。「標準語」であれば、当然、文字にも書かれ、文献にも残っただろうというわけである。これは、いうまでもなく、有名な「方言圏論」が適用される場合である。

しかし、この歴史の推定は果して正しいであろうか。真の歴史であろうか。この分布図だけを見ている限りは、この

アザ → ホシ → ホクロ、フスベ、……………(a)

という歴史を誤まりだとする積極的理由は見つからない。

3 「あざ」の方言分布

言語地理学では、ある1枚の分布図を解釈するのにも、できれば他の分布図と比較して、歴史の推定をいっそう確実なものにする。他の分布図とは、関連する物または事を表わす名称の分布図である。それと比較するという事は、語の意味上の相互関係（語彙体系の一部）を考慮するという事である。

幸に、「ほくろ」と密接な関係にある「あざ」の名称の分布図がある(図2)。ここで、「あざ」とは、「生まれつき体の一部の色が変わって、赤くなったり青黒くなったりしていることがあります。その、いつまでも消えない色の変ったところを何と言いますか。」と尋ねている、その物のことである。この図2を見ると、九州・四国・中国の一部を除いて、全国に「アザ」が分布しているが、九州・四国では「ホヤケ」が優勢で、他に「ホグロ」がある。なお、四国ではホヤケのほかにも、「ノブヤケ」「コトヤケ」「オミジルシ」がある。この分布図だけでは、これらの異称の歴史を推定することはむずかしい。

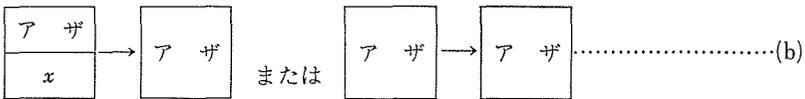
ところで、ここで大事なことは、「ほくろ」の分布図と「あざ」の分布図は、物が密接な関係にあるだけでなく、「アザ」、「ホクロ」(「ホグロ」)という共通の方言形があることである。両者は、意味の上だけでなく、形の上でも密接な関係にある。

そこで、問題になっている両地方について、「ほくろ」の方言と「あざ」の方言との相互関係を比べてみると、ほぼ次のようになる。

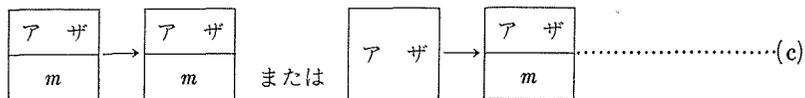
	東 北		四 国	中国西部・九州
「ほくろ」	ア ザ	ア ザ	ア ザ	ア ザ
「あ ざ」	ア ザ	ノブヤケ	ホヤケ	ホグロ

これで見ると、東北方面では、「ほくろ」と「あざ」をことばとしては区別していない。すなわち、両者の名称は一つであるのに対して、四国・中国西部・九州方面では両者をことばで区別している。すなわち、両者の名称は別々である。

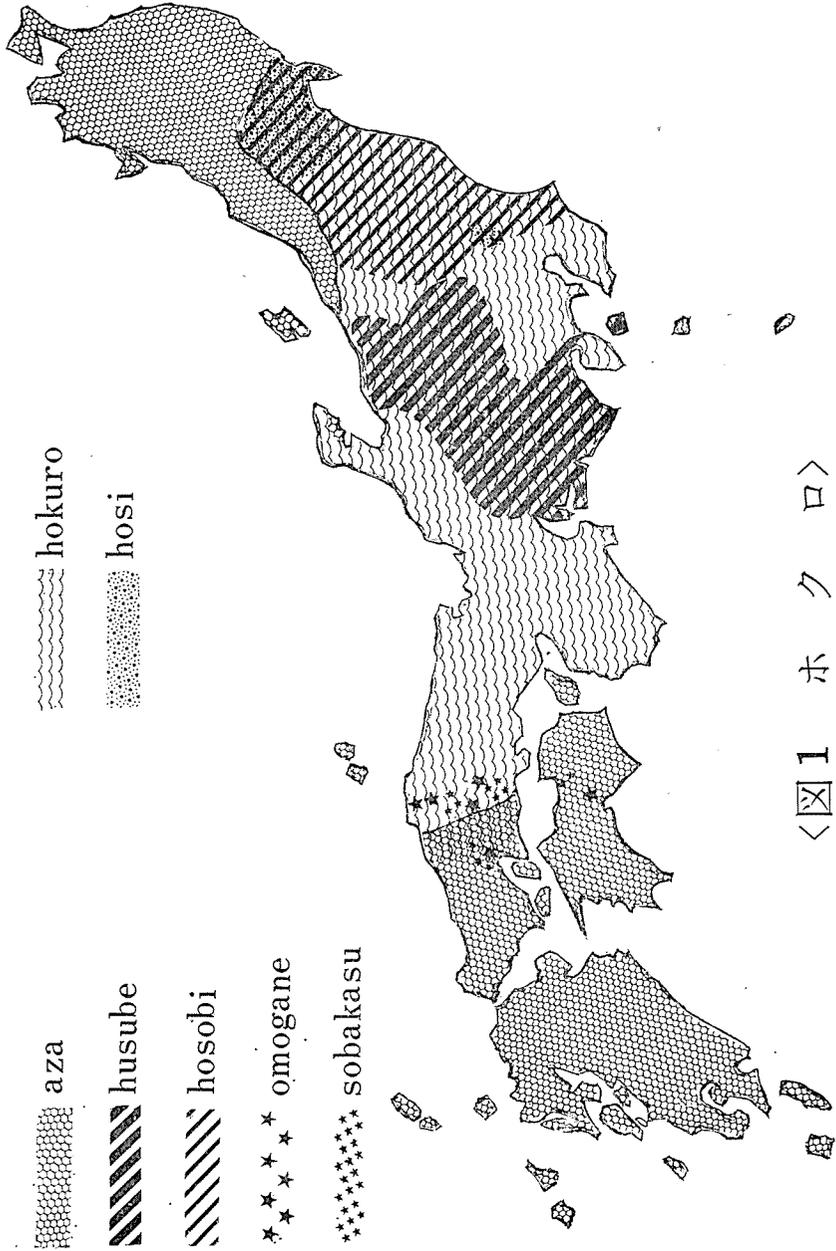
さきの(a)のような歴史を考えると、東北では、

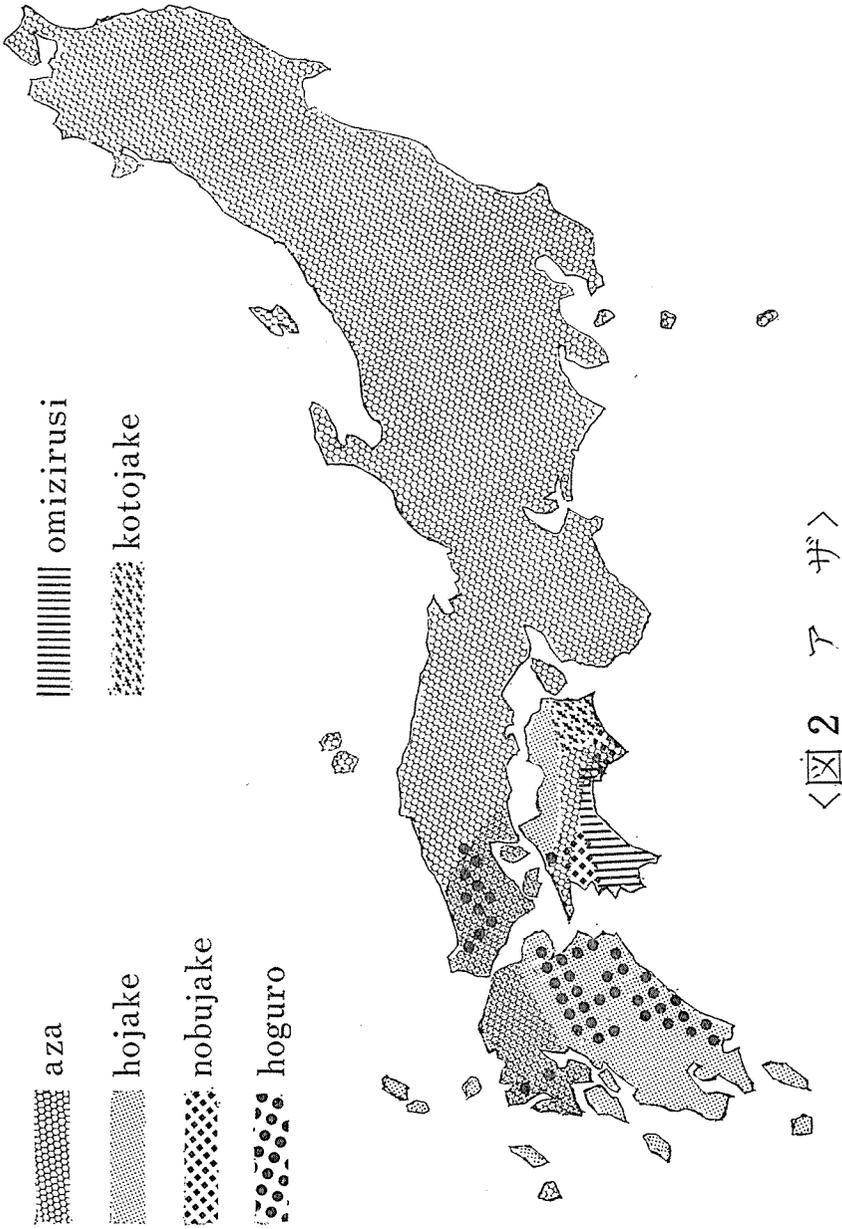


のいずれかであると推定される。これに対して、四国・中国西部・九州方面では、

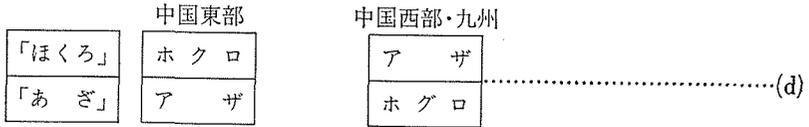


m=ノブヤケ、ホヤケ、ホグロなど



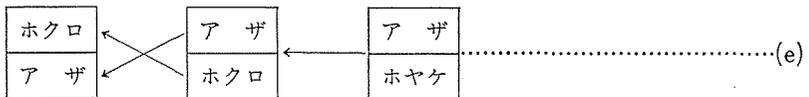


のいずれかであると推定される。しかし、(c)の第2の場合は起こりそうになかったことだと思われる。その理由は次のようである。中国東部と中国西部・九州との間には、

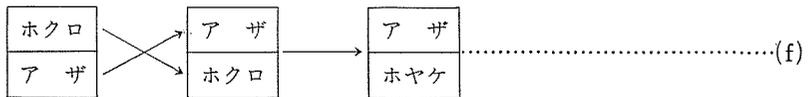


という関係がある。両者は地域も隣接しているから、「地域連続の原則」から、方言形の間には直接の移行関係があると予想される。とすると、(c)の第2の場合が成立するためには、「ほくろ」と「あざ」の名称が分化するときに、「あざ」の名称(向)として、隣接地域の「ほくろ」の名称をほぼそのまま(ホクロ→ホグロ)採用したことを認めなければならない。これはあまりにも偶然すぎると思う。

しかも、同じ地域で「あざ」をホヤケという、この語形はホグロとまったく無関係に発生したと考えることはできない。だから、考えられるのは次の二つの場合である。



なお、ホヤケ×「黒」→ホグロ



なお、ホグロ×シモヤケ→ホヤケ
ホヤケの民間語原は「火焼け」?

いずれの場合も、ホクロとアザの語形のとりかえっこを仮定しているが、いったい、こういうことは可能であろうか。可能である。たとえば、埼玉・東京・千葉・山梨・神奈川の各都県に、「かまきり」のことをトカゲ、「とかげ」のことをカマギッチョという方言が分布している。これも、この虫の名称を相互にとりかえたためだと思われる。

ここでまとめてみると、上の(a)が成立すれば、(e)だけが成立し、(f)は成立しな

い。それでは、(f)はありえないことだろうか。(a)は、実は見せかけの歴史だとすれば、(f)も成立しうる。しかし、いずれかを決定するには、この2枚の分布図だけからは決めにくい。ここで、過去の文献に情報を求める段取りとなる。

4 過去の文献における「ほくろ」と「あざ」

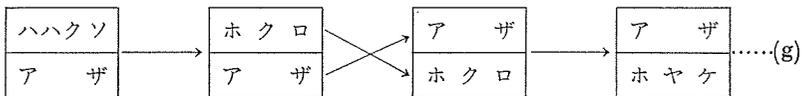
ここで過去の文献というのは、主として辞書類である。辞書以外のものに広く当たることは今後のことにして、ここでは、主として辞書類に見られることばを扱うことにする。辞書類は、必ずしもその辞書が出た当時の言語を反映しているとは限らないので、これらと比較するには慎重な扱いが必要である。また、これらの辞書に出て来ることばは、ひとまず「標準語」か京都付近の方言と仮定しておくが、これが真であるかどうかについても絶えず注意を払う必要がある。

しかし、それにもかかわらず、表1に見られるように、だれも疑うことのできない、最も明らかな事実は、「ホクロ」という語形はかつて「ハハクソ」であり、それが「ハハクロ」などを経て変化したものだということである。しかも、『倭名類聚抄』(卅 934)を見ると、

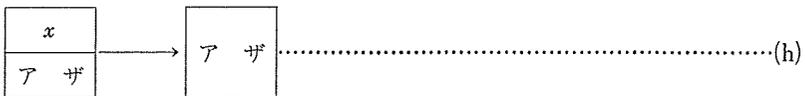
黒子 波々久曾
疵 阿佐

のように区別されているから、まず、間違いなく、ハハクソはわれわれの「ほくら」、アザはわれわれの「あざ」に当たる語である。

したがって、さきに示した(e)の可能性は消え、(f)の場合はさらに次のように書き加えることができる。



これにつれて、(a)も(b)も(c)も成立しなくなる。したがって、中国・四国・九州では(g)のような歴史があり、東北では、



のような統合が行なわれたと考えられる。

文献で「ホクロ」の形がはじめてあらわれるのは『日葡辞書』(1603)だから、中央でホクロが使われるようになったのは、16世紀から17世紀にかけてのころと思われる。とすると、現在の方言に残っている形は、おそらく、すべてが16—17世紀以後の変化形ということになる。

このような歴史は、実は(a)の推定が拠りどころとした「方言圏論」の説くのと逆のものである。すなわち、現在、京都など、かつての中央を含む近畿・中国東部に行なわれる「ほくろ」の意味のホクロ、「あざ」の意味のアザが時代的に最も古く(16—17世紀に始まる)、それ以外の地域に行なわれるものはすべて新しいということになる。それは、かつて中央では「ほくろ」と「あざ」とをことばではっきり区別していたのが、地方で統合または混同をひきおこしたということで、その歴史が2枚の地図に描かれているのだということになる。

この二つの物の名称の間に混乱が起りやすかったことは、実は文献の上からも確かめられる。たとえば、『醫心方』(984)では、「癩」の一字に「ハハクソ・ハハクロ・アザ」のように三つの訓を与えている。考えてみれば、黒い、小さい「あざ」は「ほくろ」なわけである(『蘭例語典』に「痣 あざ」「黒痣 ほくろ」とある)から、混乱の契機は物そのものにもあるわけである。

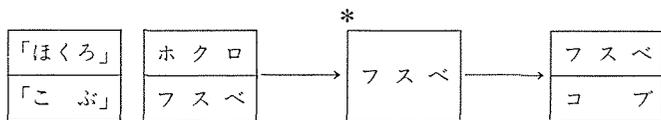
さきに、(a)で注目された、「ほくろ」の意味の「ホシ」は、文献には見つけることができない。おそらく、これはごく新しい方言形であろう。東北地方では、アザとホソビとが接触するところに分布しているから、ホシはアザとホソビとが衝突してできた第3の形であると思われる。また、中国のホシも、アザとホクロとが衝突してできた第3の形であろう。そして、たまたま両地域でその語形が一致したものと思われる。

能登と秋田県の数地点にしかない「ゴマ」も文献にはない語形である。これもおそらく新しい形であろう。

5 「こぶ」や「そばかす」の名称との混同

さて、各地における「ほくろ」の方言について、その歴史を考えてみよう。

中部地方の「フスベ」は、表1, 2, 3から、これがかつて「こぶ」を表わすことばだったことがわかる。したがって、この地方では次のような変化が行なわれたものと思われる。



上の*□の段階は、不幸にも、「こぶ」の全国分布図がないので、推定にとどまらざるをえない。ただ、『玉篇・字引早心』に「燮 フスベ ハウクロ」のような、同じ漢字にフスベとハウクロ（→ホクロ）を当てた例があるのは、この段階を推定する一つの根拠になるかもしれない。

ふくらんだ「ほくろ」は「こぶ」であるから、物相互の間にも混乱の契機はある。『名語記』（1275, 1269）の巻8にも「フス 問ハウクロノ大キナルヲフスヘトナツク如何」とある。その点から、『増補俚言集覧』（1759—1829）に見える記述はおもしろい。

はくろ 今いうホクロ〔倭字通例書〕ハウクロ 黙注或作朮又黒點共にフスベと訓す。愚按。通例書仮字誤。^(注2)

この著者にとっては「仮字誤」なもの、いまの方言分布の知識からすれば誤りではなくなる。このフスベは、中部方言か、もしくは京都方言であろう。もし後者とすれば、京都にもこのころ「ほくろ」と「こぶ」とを混同する傾向があったことになる。

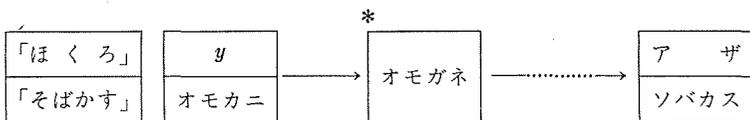
フスベと関係がありそうなのは関東地方の「ホソビ」である。分布から言うと、中間に「ホクロ」をはさんで片側にフスベ、片側にホソビがある。この分布の模様から考えても、また、中間地域の「ホクロ」が東京を中心とする地域であって、おそらく江戸時代に上方から借用したのが広まったのか、明治以後の国語教育などで広まったのかであろうことから考えても、フスベとホソビは、もとは関係のあることばだと思ふ。フスベが古い文献にある形だから、これが古いとすれば、ホソビは、あるいは「ホシ」の影響を受けて生まれた形かもしれない。

フスベ × ホシ → *ホスビ → ホソビ^(注3)

さて、次は中国・四国にある「オモガネ」という方言形であるが、これは『醫心方』以後の文献に出て来る、「そばかす」を表わす「オモカニ」と関係のあることばと思われる。オモカニがオモガネとなったのは、「お歯黒」の意味の「カネ」（鉄鑿）との混交があったと見られる。黒い「そばかす」（の一つ）は「ほくろ」である。

オモカニ × カネ → オモガネ^(注4)

したがって、この地方では次のような変化があったと思われる。



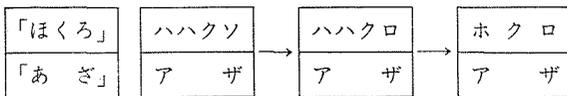
なお、おもしろいのは、オモガネの分布している地域の周辺には、「ほくろ」を「ソバカス」（おそらく「標準語」の形だろう）と答えている地点が特に目立っていることである。これは、この地域で「ほくろ」と「そばかす」の区別がはっきりしていない（*□の段階に当たる）ことを反映するものだと見られる。

四国のノブヤケ・コトヤケ・オミジルシはいずれも新しい形であろう。ノブヤケ・コトヤケの「ヤケ」は、九州のホヤケの「ヤケ」と共通の形態素と見られる。

6 おわりに

1枚の分布図だけを見ていると、いかにも「圏論」が適用されるような分布と見えても、他の分布図と比較し、さらに、文献からの情報を参考にすると、それが誤りであることがわかった。この場合は、中央にむしろ古形が残っていて、周辺では新しい形が生まれ、それが東北と九州とで偶然一致した場合である。

ここで、過去の文献だけから推定しても歴史は明らかになったはずではないかという疑問が生ずる。もしそうならば、この場合、言語地理学の方法は無用となる。果してそうだろうか。もし過去の文献だけから推定すれば、



という歴史しかわからない。そして、これは中央での変化だから、おそらく古形ではなかろうと予想する以上には進まない。

ところが、われわれの論証では、各地における、さらに新しい発展の順序と要因とを明らかにしたし、したがって、予想とは逆に、中央の語形はむしろ古い状態を残していることがわかったのである。こうして、言語地理学と言語史の総合があって初めて真の歴史が得られるのである。

——本稿のうち、文献についての調査は、山田忠雄氏から一方ならぬ指導と助力を得た。林大・山田巖・広浜文雄の諸氏からも文献について教えられることがあった。諸氏の御好意に深く感謝いたします。

注

1 「ハハクソ」は「母屎」で、母体からの排泄物の残ったものという意味である。この意味が忘れられるようになると、「黒いもの」という意味がこの語形からまって、「ハハクロ」という語形が生まれ、以後、音韻変化に従って、ハワクロ→ハウクロ→ホウクロ→ホクロ のように変化したものであろう。これらの形はすべて文献に求めることができる。なお、ハハクソの語原が忘れられかけると、一方では、母という意味のオモを新たに加えた「オモハハクソ」という語形を生み、また一方では、「クサ」(瘡)と混交して「ハハクサ」という語形を生んだが、ハハクロには勝てなかった。なお、オモハハクソについては、『和名類聚抄』は「面黒子也」と説明しているけれども、これは民間語原である可能性もある。

2 『倭字通例書』(1695)には「はうくろ はふくろモアリ 黧 或作疣又黒點 共ニフスベト訓ス」とあるから、『増補俚言集覧』の引用は正しい。

3 ホソビの発生については、次のような可能性についても考えておく必要がある。16世紀のころ中央の言語に「カマヘソベ」「カマフスベ」「カマヘソビ」ということばがあった。

類字韻・永禄六年本 黧 カマヘソベ

玉篇要略集・山田本 黧 ヤマフスベ

新編訓點略玉篇 黧 カマヘソビ

これは「鼎の底の黒いこと」(『篇目次第・内閣本』に「黧 カナヘノソコノクロキ」とある)の意味だから、このことばが関東地方にもあったとすると、

ヘソビ × ホシ → ホソビ

のような混交から生じたとも考えられる。しかし、わたしはこれが事実である可能性は大きいとは思わない。

4 『醫心方』に「面姪 オモクサ」とあるところから、オモクサは「面に生ずるかさ」(『大日本国語辞典』)であり、オモカニもオモクサと同じ(『大日本国語辞典』)と考えられているが、これはおそらく間違いであろう。これは「母蟹」ということだと思う。「蟹」は「蟹屎(かにくそ)」のことで、現代でも「カニババ」と言っているものである。すなわち、赤ん坊が生まれて初めて排泄する糞のことである。したがって、オモカニは母体からの排泄物の残ったものという意味になる。これは、注1に記した、ハハクソの語原と一致するものである。

表 1

文 献 名	年 代	あ	こ	そ ば か す			ほ く ろ							
		ア ザ	フ ス ベ	オ モ カ ニ	オ モ ク サ	オ モ カ サ	ク ロ ク サ	ハ ハ ク ソ	オ モ ハ ハ ク ソ	ハ ハ ク ソ	ホ ク ソ	ハ ハ ク ロ	ハ ウ ク ロ	ホ ク ロ
寧楽遺文・奴婢帳	750		11											
日本靈異記	822		A12											
新撰字鏡	899- 901		10					F10		W 10				
倭名類聚抄	±934	J10	T P 11			H 10		W10						
醫心方	984	A			G 16	I		DA WN					E A	
天仁三年法華百座	1110							20						
伊呂波字類抄	12C初	J	TU			F		BF KW	F				BF KW	
類聚名義抄	12C初	J	T S Q											
天治字鏡	1124~ 1125		10					F						
梅沢本・説話集	±1130							32						
色葉字類抄	1177 1181	J	TU		H			BF KW	F					
宇治拾遺物語	1213 1218							31						
愚管抄	1220						Y						30	
古今著聞集	1254	30												
名語記・金沢文庫本	1269		20					20					20W 20	
萬安方*	室町末			M										
有林福田方	1477	J K			Z				Z					
日葡辭書	1603	40												40
好色一代女	1686													V
病名彙解**	1686	一												K
倭字古今通例全書	1695		QX											R
新板増補女重寶記	1702													30
和漢三才圖繪**	1712	J10						10						AK W

山田本				Γ			
稱徳堂本				Γ	Γ		
三省堂本					T Γ		
阿波國文庫本				J	Γ		WL
岡田希雄本				Γ			
伊京本	V 16			Γ	Γ T		
岡田眞本					Γ		
饅頭屋本	VII 21	-1581		Γ			
弘治二年伊藤本	I 1 a	-1556			Γ		A
弘治二年小汀本	I 1 b	-1556			Γ		A
永祿十一年山田本	I 3 b	-1568		J Γ	Γ		A
永祿十一年草間本	I 3 a	-1568		J	Γ		A
永祿十一年寛永本	I 3 c	-1568					
圖書寮零本	I 4				Γ		
和漢通用集	I 5				Γ		
黒本本	(I)				Γ		
永祿五年本	II 7	1562			Γ		
永祿二年本	II 6	1559			Γ		
堯空本	II 9	+1565		J Γ	Γ		
經亮本	II 12	+1564		J Γ	Γ	Ж	
前田本	II 11	1586-1593		J Γ	Γ	Ж	
高野山本	(II)			J Γ	Γ		
枳園本	III 14			J	Γ		W L
易林本		-1597		Γ	O T		W
懷中節用集		+1597		J Γ	O T		Ч L
三才全書誹林節用集		1700		A		BW	KW X
蘭例語典		1815	K				L

澗 故 知 新 書	1485	J Д QT III			
遅歩色葉集元龜本	1571		Г	Л	N
天正古寫本・京大	1547 1548		Г	Л	N
天正古寫本・靜嘉堂			Г	Л	N
天正古寫本節用集	1574- 1579		Я		W
塵芥・鈴鹿本		J Г O Q K П T			
塵芥・船橋本	-1550		Q T	Ж	Я W
下學集・眞如藏本					Ю
下學集・上野圖書館本					Ю

Г 瘤, 瘡, 瘡, 瘡 Д 瘤瘧 Ж 面颯, 颯面 Л 面蹠 П 疝 Ч 癩
 癩 Ш 疝 Ю 墨子 Я 癩, 癩

表 3

玉 篇 類	系譜 介瀬分類	年 代	あざ	こぶ	そばかす	ほくろ							
			ア ク ロ ア ザ	フ ス ス ベ	オ モ カ ニ	オ モ ク サ	ク ロ ク サ	ク ロ カ サ	ハ ハ ク ソ	オ モ ハ ハ ク ソ	ハ ハ ク ソ	ハ ウ ク ロ	ハ ウ ク ロ
字鏡抄・天文本		-1547	J H α γ		Н Н		Я ψ F					F	
字鏡抄・永正本		1508	J δ ε			ε	A F F H ρ					F	
字鏡集・前田本		1416- 1417	J H α γ		Н Н Н	ε	A ρ Я F					A F	
字鏡集・龍谷大本			J ε α γ ζ				A F					K F	
類字韻・永祿六年本	VIII	1563	η	A O R Γ									
和玉篇・慶長十年本	III	1605	H	O	H		A F						
類字韻・靜嘉堂本	VII	-1605		O Γ									
和玉篇・慶長二十年本	非IV	1605		A O σ			A					A	
玉篇要略集・山田本	非IV			A O σ Γ								AK	
篇目次第・内閣本	II		J H Π θ λ				A ψ						
新編訓點・略玉篇	II		A Γ				F						
拾篇目集・山田本	III						F						

拾篇目集・上野図書館本	III		Jγ	OШ		A F Я ρ	
和玉篇・圓乘本	III		μ	Oσ			
音訓篇立・黒川本	III		H	O	H	A Я F F	A
類字韻(初字通韻合寫)	VII			A			
和玉篇・長享三年本	IV	1489		Aλ	A		A
玉篇略・天正十四年	IV	1586	α	Aσ			A
和玉篇・慶長六年本	IV	1601	α	Oσ			A
玉篇略	IV	1785	α	Oσ ω			
玉篇略・岡田眞本	IV	1785		A			A
和玉篇・中下零本	IV	1799	A	A O σ φ	A		
玉篇・岡田眞本	IV	1800		A O σ			A
倭玉篇・靜嘉堂本	IV			A σ λ			A
和玉篇・上野図書館本	IV		β δ ν ξ	A O σ		A	A
倭玉篇・伊勢本	IV		J	A O σ			AK
玉編・字引早心				A O σ			A A
玉篇・山田本				A σ λ	A		A
倭玉篇・靜嘉堂本			J	A σ λ			AKA
和玉篇・木活字版			J H λ				

α 瘡 β 瘡 γ 痕 δ 痂 ε 疥, 痒 ζ 癩 η 瘡 θ 瘡
 λ 癩 μ 瘡 ν 痘 ξ 瘡 π 疔 ρ 癩 σ 癩 φ 疥
 χ 癩 ψ 瘡 ω 瘡